

KOMAZAWA × KANSAI



関大DFと競り合う中後。ユニバ代表合宿では中心選手としてフル稼働。その影響もあったのか、体が重い印象をうけた（撮影・岩田陽一）

第27回総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント 1回戦

駒澤大学 1 - 0 関西大学

主力選手に疲労蓄積 本来の駒大サッカーには程遠く…

これは最大の目標達成のための戦いだ

「内容はよくない。でもトーナメントだから勝つことが大事」。秋田監督は試合後、安堵の表情を浮かべながらそう語った。

連覇を狙う総理大臣杯初戦の相手・関大は、名古屋グランパスエイトの特別指定選手である前田を擁する好チーム。ユニバーシアード代表で前田と共にプレーしている中田や中後は、事前に前田の特徴などをチームメイトに伝え、警戒してこの試合に臨んだ。

しかし試合後、選手たちの口から聞かれた言葉は「相手がどうこうというよりも、自分たちのやるべきことがほとんど出ていなかった」という反省の弁ばかりだった。

実際、そうだった。駒大がスロースターターであるというのは有名だが、この日は関大が退場者を出すまで、一度もエンジンがかかることは無かった。中田はその原因として「巻へのキックの精度が低くリズムを作れなかったこと」、次に「グラウンドがスリッピーでボールがうまくつなげなかったこと」を挙げた。だがそれ以上に主力選手が本調子でないことが、駒大のリズムで試合を展開できなかった大きな要因だと思われる。

駒大は4人も主力選手をユニバ代表に送り込んでいる。「自分の出来は全然ダメだった」と中後が言えは、「リーグ、開カレ、ユニバの合宿と立て続けにあり、目に見えない疲れがあるのかも」と中田が足をつるといふ珍しい場面があった。スタミナに絶対の自信を持つ中田、彼のそんな姿からは、かなりの疲労が蓄積していることが容易に想像できた。今大会は一日おきで行われるため十分に回復する時間は無い。試合の無い日にかいま多く体調管理ができるかが、連覇への鍵となるのかも知れない。

試合は後半16分、スローインから最後はゴール前で待ち受けていた巻が、半身の体勢から右足で蹴り込み先制。その後は一人多い状況ゆえ、関大を攻め立てることが予想されたが、「相手